遺跡からのメッセージ（23）

イスラエルの遺跡調査 ⑨
ガリラヤ湖畔の要塞都市、エン・ゲヴ

天理大学文学部教授
桑原　久男　*Hisao Kuwabara*

エン・ゲヴ遺跡の発掘調査

南北に細長いイスラエルの海岸平野は、ナイル川から地中海に押し出された砂が堆積して延々とまっすぐな海岸線を形成している。その海岸平野に沿って、テル・アヴィブの郊外にあるベン・グリオン空港から北に向かう幹線道路が、日本の調査団が通い慣れた道だ。大小のビルが林立するテル・アヴィブの町を通り過ぎ、ひたすら北へと進み、旧石器時代の洞窟遺跡があるカルメル山の手前で道路を東に折れて谷筋に入り、中央山地を横断する。谷筋を抜けてイズレルの平野に入ってすぐの場所に聳える有名なテル・メギドーは、メソポタミアとエジプトをつなぐ古代の重要な通商ルートとして知られる海の道を望み、交通の要所として大きな戦争の舞台となった場所でもある。往事の発掘の跡が如実に残る小高いテルの上に立って眺めると、眼前には緑豊かな色とりどりの田園風景が一面に広がる。イズレル平野をすぎて、ヨルダン川沿いの道を北上するとやがて青々としたガリラヤ湖が目の前に現れる。シリアとアフリカにまたがる大地溝帯の底にあるこの場所の地面は海抜マイナス 200 m。ガリラヤ湖を東回りにぐるりと回るその途中にあるのが、日本隊が調査を行った二つ目の遺跡が所在するキブツ・エン・ゲブだ（写真１）。

（写真１）ガリラヤ湖畔のエン・ゲブ遺跡

キブツ・エン・ゲヴはイスラエルに数あるキブツの中でも歴史が古く、植民の第一世代の人々が植えた樹木が小高く聳えるように成長して家々を囲み、落ち着いたたたずまいを醸し出している。樹木に囲まれた小さな丘がエン・ゲヴ遺跡のアクロポリスで、1990 年～ 2004 年にかけて、ここで日本隊が断続的に発掘調査を行った。1987 年頃、新しくテル・アヴィヴ大学による考古学研究プロジェクトが始まるので、それに参加しないかという呼びかけを受けて、テル・ゼロール遺跡発掘調査の関係者が再結集し、新たなメンバーも加わって組織されたのが、考古学・宗教学・聖書学などの研究者による「日本聖書考古学発掘調査団」（第１期団長；金関恕・天理大学教授）だった。数年の国内的な準備を経て、発掘調査が開始されたのが 1990 年のこと。日本考古学を専攻する大学院生であった当時の筆者は、金関恕先生（天理大学教授）から誘いを受け、最初のシーズンは何もわからず、学生ボランティアとして発掘調査に参加したのだが、天理大学に勤務するようになった次の年からは「聖書考古学発掘調査団」の団員となり、その後、夏はイスラエルへと調査に出かけるのが、いつの間にか恒例のようになり、現在に至っている。

日本隊に遺跡調査の参加を呼びかけた故モシェ・コバヴィ・テル・アヴィブ大学名誉教授は、イスラエルの考古学の第一人者だが、1964 年～ 1966 年、若き日に、日本隊がイスラエルで初めて行ったテル・ゼロール遺跡の発掘調査で現場監督を務めた経験をもつ。エン・ゲヴ遺跡の発掘調査そのものは、イスラエル考古学内部における地域研究、学際的・国際的調査研究の要請という情勢などを受けて展開したより大きなプロジェクトの一環だったが、テル・ゼロールの調査組織とイスラエルの研究者との交流が長く継続した結果として、日本隊が参画して一翼を担うことになったのだ。

鉄器時代の要塞都市

エン・ゲヴ遺跡の発掘調査（第Ⅰ期）では、ヘレニズム時代の建物跡のほか、鉄器時代に築かれた上下２層の列柱式建物が発見され、アクロポリスを囲む壮大な二重城壁の存在が明らかにされ、ソロモン時代の要塞都市の一例として注目を集めた。エン・ゲヴ遺跡の発掘調査は、その後、雪崩的な情勢悪化にも左右され、また予算の問題による中断期間をはさみつつ、月本昭男・立教大学教授を第Ⅱ期団長として 2004 年まで継続された。その結果、ローマ時代の石灰窯の存在、ヘレニズム時代の町並みの広がりのほか、下層の列柱式建物の構造、南北方向にまっすぐ伸びる二重城壁の構造、城壁コーナー部に築かれたタワーの存在など、アクロポリスに築かれた鉄器時代（紀元前 10 ～８世紀頃）の建築遺構が明らかになった（写真２）。こうして、古代イスラエルとアラムの国境線に位置する要塞都市として、鉄器時代のエン・ゲヴを位置づけることが可能になったといえる。ただし、その歴史的位置づけには次のような問題がある。

実は、エン・ゲヴ遺跡の発掘調査が始まった 1990 年代のはじめ頃、日本隊の調査で見つかった下層列柱式建物と壮大な二重城壁は、紀元前 10 世紀、すなわち、旧約聖書の列王記に記されるソロモンの統一王国時代に築かれたと考えられていた。ところが、その後、ダビデやソロモン時代の歴史については疑義がもたれるようになり、イスラエル統一王国の繁栄が考古学的に裏付けられるかが、1990 年代以降、喧々諤々たる論争になった。それまでダビデ・ソロモン時代＝紀元前 10 世紀とされてきた考古学の遺物や遺構を紀元前９世紀に位置づけなおすフィンケルシュタインの学説（低年代説）が登場し、従来の年代観と新しい低年代説との間の論争が決着しないのだ。

（写真２）エン・ゲブ遺跡の調査区全景

日本隊がエン・ゲヴ遺跡で発見した鉄器時代の建築遺構は、まさにその論争の渦中にあり、紀元前 10 世紀なのか、９世紀なのか、調査関係者の中でも意見が分かれている。旧約聖書列王記には、分裂王国時代（紀元前９世紀）、アラム王国とイスラエル王国が国境に位置するアフェクの町をめぐって戦ったとの記述があり、アフェクの戦いでは、数の上で圧倒的に優勢なアラム軍に対し、弱小のイスラエル軍が、しかもアラム軍が得意とする平地戦で勝利したとされている。エン・ゲヴ遺跡こそがこのアフェクにあたるとする有力な説があるが、発掘された鉄器時代の建築遺構が紀元前９世紀の所産だとすれば、その学説を補強することになる。ともあれ、エン・ゲヴ遺跡が、古代イスラエルの歴史を考えるうえで、非常に重要な材料を提供していることは間違いない。